

東彼杵 グラフ

19/23郷 小音琴郷

丘の上のコーギーに癒されて
山の奥深くまで秋の散策。
100年以上の歴史を誇る学び舎には
たくさんの笑いと涙があった。



小音琴郷から通う13人の子どもたち。
地域みんなで最後の運動会を楽しんだ

制作 地域おこし協力隊 文 | 飯塚 将次 写真 | 堀越 一孝 デザイン・写真 | 小玉 大介

「こういう鎌を持って山へ入ったんだよ」と谷山満三郎さんへ



谷あり山ありの地域おこし

小音琴郷は東彼杵町の最西部、川棚町との境にある。大村湾に面しているが、海岸ぎりぎりをJRが走り、国道も平行しているため、そこには出られない。当然、高台からの方が景色はいいので、看板に誘われて“ドッグ・ヒル”へ上った。ゲートから様子をうかがっていると、すぐに気付かれて、「ワン!ワン!」と歓迎ムード。かわいいお尻ふりふり歩きに誘導されて中へ入る。

「ここはウェルシュ・コーギー専門犬舎です。早岐からこっちに来て6年ですかね。ワンちゃん好きが集まれるお店にしようとオープンしました」と岩崎由子さんが対応してくれた。日本で一番大きなドッグショーで2年連続1位になった評判が、ブログやネットを通じて口コミで広がり、休日には東京や北海道などからもファンが来てくれるという。

「うちはラーメン店とかファミレスのようなお客さんを回転させるお店ではないです。朝から夕方までゆっくりと、ワンちゃんに癒されてという感じですかね」と岩崎さん。カフェレストランなので、犬を連れていなくてももちろん利用できる。メニューには“彼杵バーガー”もある。「私が佐世保の出身で、どこに行ってもハンバーガーがあった。だからこっちでも大きなハンバーガーを食べたくて。せっかくなのでそのぎ茶を入れた緑色のパンズにして、ジュシーな肉にもこだわりました」

テラスでは大きな海景色が広がる。駆け回るコーギーたちはさすがに躰がよく、いい具合に相手をしてくれ、生まれて数か月のよちよち歩きにも癒された。

小音琴川沿いを歩く。田んぼにはざっしりと実った稲穂が頭を垂れている。

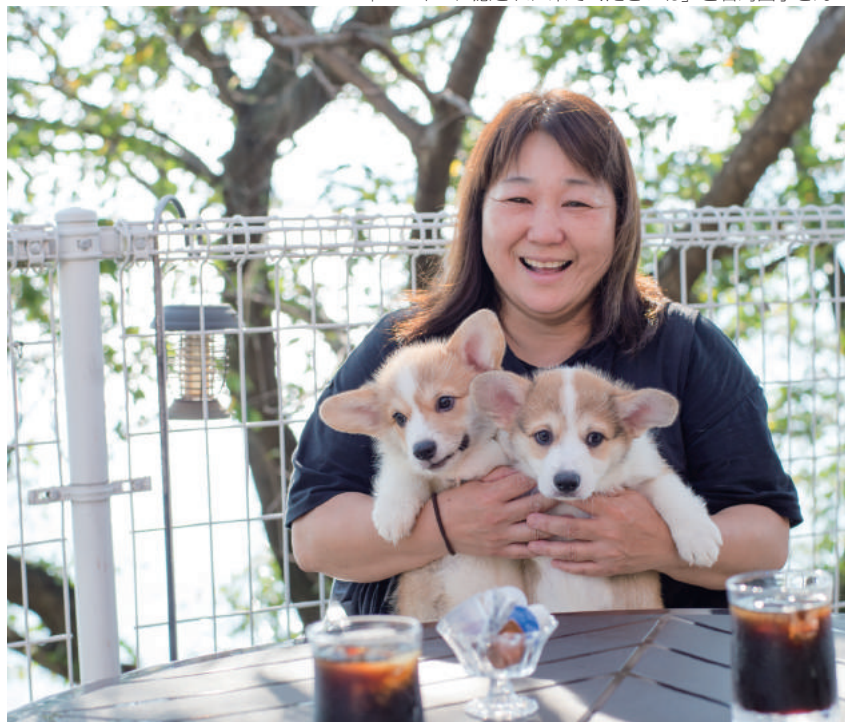
ログハウスがあるところに出た時、突然、「ブッ、ブヒィ!」とイノシシの慌てた声と、「ザッザー」とずり落ちたような音が響いた。生体は確認できなかったが、恐らく近くにいる。来た道を引き返す。

小さな橋近くの田んぼまで数名が作業中。「今年はちっと多かぞ」「みなさん困つとらすよ。大挙して来るからひと粒もなくなるぞ」。前夜にイノシシ7頭の見撃情報あったため、電柵のワイヤーを増やすなどしてその対策を講じていた。刈り取るまであと数日というのに事態は深刻なようだった。

地域の歴史に造詣が深い、谷山満三郎さんの家を訪ねた。「郷でオレより詳しくかもんはおらんやろ(笑)。音琴のねの字から語らんばね」と谷山さん。奥さんのマシさんが庭にコンテナを並べてしゃべり場を作ってくれる。今年最後のセミが元



「コーギーに癒されに来てくださいね」と岩崎由子さん



えてもらって、農林金融のことなどを習っておるわけ。お金の借り方とかなんとも。だからこんなに榮えかしたのよ」と明治38年築の大きな家屋を指差した。

父の大九郎氏は小佐々町で真珠の養殖をしていた。不景気で仕事がない頃だったが、地域の人たちを40名ほど雇用し、一緒に働いたそう。谷山さんも「地域を、山を大切にせにゃいかん」という思いを受け継いだ。昭和36年に長崎県林業公社を立ち上げる際には発起人に名を連れね、小音琴郷の山にふれあいの森を整備。造林事業には地域の雇用もたくさん生んだ。「農業以外の収入をと、

奥さんたちも山へ入りましたもんね。植林とか下刈りとかね。もちろん私も」とマシさん。

昭和46年、谷山さんが町議員になった時には、農林道の整備をしたり、林地災害予防法を適用させ防護堤などを設置した。ほかにも、彼杵港湾の事業推進や町内の小中学校の鉄筋化などの功績があり、平成25年には陛下から旭日単光章を授与された。

「言うて聞かせんばねと思って(笑)」と地域おこしの先輩の話はどれも熱が入っていた。帰路の稲穂はすっかり黄金色になっていた。

気に鳴いていた。

「昔はね、今の川棚警察署のあたりまで小音琴村だったのよ。徳川時代には大村湾に塩田があった。塩をつくるためには海水を沸かす燃料が必要だったので、ここの山から薪を供給していた。多い時で月に2000束も。大村藩の塩の約8割をまかなっていたんだから」と谷山さん。林業として、山の資源をお金にできたのは、全国的にも珍しかったのではないかと話す。

谷山さんの祖父の満太郎氏は昭和初期、幹線道路を拡幅して牛馬の荷車が通れるようにした時局匡救事業に尽力。元衆議院議員で音琴小学校の初代訓導だった島津良知氏の最初の生徒で、「小さか頃からこの子はちょっと違うとるばいと言われてた。後々にもいろいろと教



マシさんは私たちを子や孫のように優しく迎えてくれた



音琴っ子が駆けつけた最後の運動会

晴れやかな日だった。今年度限りで閉校となる音琴小学校の運動会を見学した。全校生徒はわずか26名、その半数が小音琴郷から通う生徒たちだ。

当日は、最後の運動会をこの目に焼きつけておこうと、保護者だけでなく、地域の人たちや卒業生ら多くの人が集まった。孫に手を引かれるおじいちゃん、赤ちゃんを抱いた若いママなど、さまざまな思いで坂道を上ってくる。会場では同窓会のような会話があちこちで聞こえた。

減少する生徒をカバーしたのは地域力。大人たちが裏方に回り、競技にも参加して運動会を盛り上げてきた。「ここでの、この形での運動会がなくなると言うとなんか寂しい」「音琴面浮立や一輪車はどうなるのか」という声を聞くと、地域で毎年楽しみにしていた行事であることがわかる。

低学年の生徒を持つ保護者に話を聞いてみた。「三世代でお世話になった学校なので寂しいが、そんなことは言っていない。生徒は多い方がいい」「小音琴から歩くと結構距離があった」

田んぼまで出会った長下正之さんもインシのことはいったん忘れて、その瞬間を楽しんでいた。「地域にどのような形で残ってくれるかが問題」と長下さん。大好きなわが母校がどうなるのか、という地域の声は多かった。

また、「音琴小学校物語」を執筆中の谷山さんは、「“北海道の太陽”といわれた南鷹次郎農博や、西田卯八文博・謹一医博などを輩出した名校だったんだよ」と教えてくれた。

生徒たちは日々の練習の成果を存分に発揮。いきいきしており、誰も悲しんではいない。日に焼けた26の笑顔が眩しすぎる。この日も音琴っ子の思い出としてしっかりと刻まれ、地域の絆はさらに強まった。長い歴史の幕が閉じてもこのまま駆け抜ける。

※小音琴郷へは、町営バス「小音琴」のバス停を利用。

次回は燕郷。お楽しみに！



上から

- ・前を目指してひたむきに走る子どもたち
- ・“ありがとう”がいっぱいの運動会になった
- ・「跡地はみんなが寄れる場に」と長下さん